老人と少年

深町　準之助

老人と少年が
公園の隅で
キャッチボールを
している
春の日差しを
浴びながら

少年の球は速く
老人の球は遅い

昔は逆だった
コントロールも
老人のほうがはるかに
正確だった

老人は20球も投げると
へばってベンチに
腰を下ろしたが
少年はまだ
投げ足りない様子

夕暮れまでのひととき
二人はそうやって
再会を楽しんでいる

楽しい絵手紙

筑後市一条
松延　秀子

初めて絵手紙教室に参加して、先生の言葉に引き込まれました。

『下手がいい、下手でいい。少しくらい墨がにじんでも、形がゆがんでも、それはそれで味わいのうち。絵手紙に上手・下手はありません。楽しく描いた気分が相手に伝わればそれでよいのです』と言われ、それなら私もやってみようと決めました。その後仲の良い友達と「てくてく絵手紙教室」というサークルを作り、今も続いています。月二回の教室ですが、上達しない私を先生はほめながら励まされます。

最近は、主人が「最初の頃より少しは良くなって見られる様になってきた」とほめてくれるので教室に行くのがますます楽しくなりました。いつも若々しい先生のユーモアあふれるお話し、皆さんとのおしゃべり、会員の作品に刺激される和気あいあいとした教室に行く日が待ち遠しい日々です。

こんにちは。八女警察署です。⑧

八女市黒木町在住の草場明治さん（75歳）が代表を務める青少年健全育成ボランティアグループ「スキップ」が、内閣府が主催する「子どもと家族・若者応援団表彰」（青少年等を育成・支援する団体表彰）において「チャイルド・ユースサポート章」を受章されました。

「スキップ」は平成17年から、黒木町の青少年健全育成を目的としたボランティア団体で、当時少年等の溜り場となっていた堀川バス黒木待合所の清掃活動を行って、町内の教育機関から寄せられた、幼児、児童、生徒の絵画や作文などの作品の展示活動、また、折り紙教室や黒木町の風土や歴史をオリジナルの紙芝居にして児童に読み聞かせるなどの活動を続けられています。今回、その功績が認められ、チャイルド・ユースサポート章の受章となりました。「スキップ」の皆さん、受章おめでとうございます。

※現在、「スキップ」では、共に活動を行ってくれるメンバーを募集中です。

健康万歳⑫
気軽に相談できる「かかりつけ医（家庭医）」を持とう

「3時間待ちの3分診察」よく聞く言葉である。大きな病院に行けば長く待たされたうえ診察時間が至って短いと皮肉を込めた言葉だが、当らずと言え真意は突いているような気がする。

色々と医療バッシングを聞かされるが、最近急速にお医者さん患者さんの関係が希薄になったことは否定できない。

気になることだが、病院に行くと「○○様」との呼び出しをよく聞くが、丁寧に応対すれば良いというものでもあるまい。患者様では聞いて居て他人行儀で親しみが湧いてこない。

これまでは開業医が地域の医療の担い手として大きな役割を果たし土地の人達と息の合った関係を保ってきた。夜間往診に行って患者さんの家でそのまま朝まで飲み明かしたなど微笑ましい話は最近まるで聞かない。

日本医師会は1993年に改めて「かかりつけ医」の制度化に踏み出した。開業医（家庭医）とかかりつけ医とは殆ど同じ意味で違いは無い。

EU諸国など前々からかかりつけ医の紹介状なしでは病院が受け付けないという話を聞いていたが、診療所と病院の役割分担が明らかにされており望ましい制度であると思っていた。

急速な医学医療の進歩で標榜科目が細かく細分化され、医療が医業となった頃から「なんでもかんでも病院へ」と大病院志向が強くなり医療本来の姿が可笑しくなった気がしてならない。

家庭医（かかりつけ医）は家族一人ひとりの生活背景を良く知り、何よりも継続性を持っている。病気に限らず予防、健康管理のよろず相談に気楽に応じて貰える利点があり、一寸した異変でも早期に発見し病気の進行を食い止めることも出来る。入院や高度医療が必要であれば適切な医療機関や専門医を紹介して貰えるし、ひいては医療費削減にも繋がってくる。

林　榮一
（医師・八女市立花町）

草花の寄せ植え体験

八女農業高等学校

八女農みらい館（学校農産物販売所）のイベント「草花の寄せ植え体験」を昨年12月に開催しました。テーマは「お正月から春の寄せ植え」です。事前公募により、今年は13名の方が体験をしていただきました。使用花材は葉ボタンやパンジー、アリッサムやナデシコ等の色とりどりの草花を使用し、参加者思い思いの色合わせで作品を作ることができました。

生徒たちは、日頃の実習の成果を発揮すると同時に、教えることの難しさを学ぶことができ、参加された地域の方と会話を楽しみながらイベントを終了しました。

八女農みらい館では毎週火曜日と金曜日の2回、10時30分～15時30分（夏休みと冬季は10時30分～12時30分）に販売実習やイベントを通して生徒たちに実践力を身につけさせる人材育成を授業の一環として設定しています。

3月の（みらい館）の開館日
3日㈫、6日㈮、13日㈮、17日㈫、24日㈫、27日㈮
多くの皆様のお越しを心からお待ちしています。

呟き
「マッサン」に見る日本の男性

NHKの連続テレビ小説『マッサン』の中で、スコットランドから嫁いできたエリーが不安を感じるシーンがあった。マッサンは日本に帰ってきたら朝のハグもキスもしなくなったのだ。「愛している」も言わなくなった。仕事から帰ってきたら黙りこんで楽しそうじゃない。でも他の人とは楽しそうに笑っている。なぜ？近所に住む女性がエリーに諭す。「日本の男性はそうなのよ。それは妻を信頼しているからなのよ」私はこのシーンが忘れられない。私の中でこれを理解する私とそうでない私がいるからだ。「そんなことしなくてもわかりきっているだろう」それが日本男性の言い分だろう。そこには「こっちはそれどころじゃない。面倒くさい」と、気持ちに余裕がない状況があるのかもしれない。でも、それを当たり前としないでほしい。ハグをするだけでどれだけパートナーの心が安らぐか。パートナーを思いやる気持ち、表現する気持ちを日本の男性も持ってほしいと、同じ女性として願う。二人で生きているのだから。

一方で、エリーに対して許してくれる、わかってくれると信頼しているからマッサンは素の自分を見せ、気を遣わないのだろうとも思う。笑顔が見られないのは寂しいけれど、信頼されているのは嬉しい。「疲れているんだな。大変なんだな」と、理解してあげる…それが見えない信頼の絆なのかもしれないとも思う。

寂しいと感じたり、信頼されているから喜ばしいことだと感じたり、そんな二つの気持ちが私の心の中で行ったり来たりするシーンだった。

その後ドラマは、少しずつ会話が増えたことでお互いの気持ちや状況に気づく二人へ。マッサンの苦労を理解し支えるエリーと、そんなエリーに癒され感謝するマッサン。変わっていく二人の姿に救われた気がした。

森　志穂